忠義な犬

楠山正雄

一

むかし陸奥国（むつのくに）に、一人（ひとり）のりょうしがありました。毎日（まいにち）犬（いぬ）を連（つ）れて山の中に入（はい）って、猪（いのしし）や鹿（しか）を追（お）い出（だ）しては、犬（いぬ）にかませて捕（と）って来（き）て、その皮（かわ）をはいだり、肉（にく）を切（き）って売（う）ったりして、朝晩（あさばん）の暮（く）らしを立（た）てていました。

ある日りょうしはいつものように犬（いぬ）を連（つ）れて山に行きましたが、どういうものか、その日は獲物（えもの）が一向（いっこう）にありません。そこで心（こころ）をいらだたせながら、ついうかうか、獲物（えもの）を探（さが）していくうちに、だんだん奥（おく）へ、奥（おく）

へと入(はい)っていって、そのうちにとっぷり日が暮(く)れてしまいました。

　こう山奥深(やまおくふか)く入(はい)っては、もう今更引(いまさらひ)っ返(かえ)して、うちへ帰(かえ)ろうにも帰(かえ)れなくなりました。仕方(しかた)がないので、今夜(こんや)は山の中に野宿(のじゅく)をすることにきめました。一本(ぽん)の大きな木の、うつろになった中に入(はい)って、犬(いぬ)どもを木のまわりに集(あつ)めて、たくさんたき火(び)をして、その晩(ばん)は眠(ねむ)ることにしました。するうちつい昼間(ひるま)の疲(つか)れが出て、人も犬(いぬ)も眠(ねむ)るともなく、ぐっすり寝込(ねこ)んでしまいました。

二

ふと夜中になって、けたたましく犬の鳴き立てる声がしました。驚いてりょうしは目を覚ましました。ぼんやり消え残っているたき火の明りに透してみますと、中でいちばん賢い、獲物を捕ることの上手な犬が、火のまわりをぐるぐる回りながら、気違いのようになってほえ立てていました。りょうしは何事が起こったのかと思って、山刀を持って飛び出して、そこらを見回りました。けれども、何もそこにはほえ立てるような怪しいものの、影も形も見えませんでした。ほ

かの犬たちも目を覚まさせられて、いっしょにわんわんほえながら、これもやはり獲物をかぎ回っていましたが、何も見つからないので、すごすご、しっぽを振ってもどって来ました。

その中でも、さっきの犬は、あいかわらず気違いのようにほえ回って、主人のすそを引っ張るやら、背中に飛びつくやら、たいそうらんぼうになって、しまいには今にもかみつくかと思うように、はげしく主人にほえかかりました。だんだん、その様子がおそろしくなるので、りょうしも気味が悪くなりました。刀を抜いておどしますと、犬はなおなおはげしく狂い回っ

て、りょうしの振り上げる刀の下をくぐって、いきなりその胸に飛びつきました。りょうしはびっくりして、思わず犬をつき放して、振り上げていた刀で、犬の首を切り落としてしまいました。山の中があんまり寂しいので、気が変になって、犬が狂い出したのだと、りょうしは思ったのでしょう。

ところが驚いたことには、切られた犬の首は、いきなり飛び上がって、りょうしの眠っていた頭の上の木の枝にかみつきました。すると暗やみの中から、うう、うう、とうなるようなものすごい声が聞こえました。やがてばっさりと、まるで大木でも倒れたような

音がして、何か上から大きなものが落ちてきました。りょうしは驚いて、火をともしてよく見ますと、四五間もありそうな長さのおそろしい大蛇が、とぐろを巻いたまま落ちてきたのでした。そののどに犬の首がしっかりとかみついていました。木の上に住んでいた大蛇が、夜中に、りょうしをのもうと思って出て来たのを、賢い犬が見つけて、主人を起こして助けようとしたのです。それが主人に分からなくって、かわいそうに殺されてしまいましたが、主人のためを思う一念が首に残って、飛んでいって、大蛇をかみ殺してしまったのです。

りょうしはつくづくかわいそうなことをしたと思って、涙をこぼしながら、死んだ犬のために、りっぱなお墓をこしらえてやりました。忠義な犬のお墓だといって、みんながおまいりをして、花やお線香を上げました。

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社
１９８３（昭和58）年４月10日第1刷発行
入力：鈴木厚司
校正：大久保ゆう
２００３年９月29日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。